

IV-345

松浦市石倉山の地滑り危険地区の住民の避難体制について

ナショナル住宅産業(株) 正員○佐藤泰宏
長崎大学工学部 正員 高橋和雄

1. まえがき 長崎県松浦市の石倉山(313m)に、昭和63年8月末、東西に伸びる約150mの冠頭部亀裂が馬蹄形に発生しているのが発見されて以来、亀裂が拡大していた。平成2年の梅雨期には大崩壊が発生することが懸念されていたため、松浦市では山の麓の危険地区の住民の避難体制を検討してきていた。6月26日から雨が強く降りだすと、福德地区の住民の事前自主避難が開始され、7月2日九州中北部集中豪雨時に、松浦市から福德地区に避難勧告が出された。雨がやんだ2日後の4日に石倉山は、大滑動を開始し、頂部付近で50mの落差及び東西方向に約500mにわたり亀裂が生じた。土石は麓の民家のある福德地区まで400mまで流出した。地滑りは、停止しているが、防災工事には時間がかかるので、避難した住民は仮住居に移ったままの生活が続いている。今回の地滑りでは、災害救助法の適用や応急仮設住宅の建設が認められなかったため、松浦市は独自で、住民の避難生活の援助の一部をした。本研究では、地滑りに対する松浦市の対応、福德地区の住民の避難体制と避難生活を調査して問題点を明らかにするものである。

2. 石倉山の地滑り歴 石倉山では、昭和20

表-1 石倉山系の地滑りの記録

年代後半から昭和30年代前半にかけて、表-1に示すような大地滑りが頻発した。昭和27年、28年の石倉山地滑りは、今回の地滑りの東側に隣接する斜面で発生した。このとき、地滑りは非常にゆっくりと進行し、土石は、海岸近くまで流れ出した。前回と今回の地滑りでは、地形、地質及び保全対象の位置関係

明治42年9月26日	木場免角ノ元(笠山)崩壊 八幡山埋没
昭和26年2月16日	人形石山系 伊万里市山代町
昭和27年10月16日	横岩谷と浦田谷の耕地の埋没 国鉄高峯トンネル西口閉塞
昭和28年6月26日	鉄道埋没、江迎川堰き止め自然ダムができる
昭和32年6月	伊万里市山代地滑り
平成2年7月4日	笠山地滑り

がよく似ているために、前回の地滑りは、住民の避難対策に参考となる災害である。

3. 石倉山地滑りに関する行政の対応 (1)石倉山地滑りに関する事前対策 松浦市は平成2に入ると石倉山地区地滑りの避難対策を検討し始めた。6月20日に、石倉山地区で予想される地滑りによる災害を防止し、その被害を軽減することを目的とした「石倉山地区地滑り対策連絡会議」を開催し、これまでの地滑りの経過報告及び今後の対応について協議が行われた。6月21日から、想定地滑り災害危険区域内説明会が福德などの想定被害地区で順次開催され、避難場所の再確認と各施設の提供依頼がなされた。雨が降る毎に地滑りは進行していたが、6月28日から雨が強く降り出すと、福德地区の住民の自主的な避難が始まった。7月2日午前1時30分到大雨洪水警報が発令され、松浦市は午前6時に災害対策本部を設置し、福德地区の57世帯126人に対して避難勧告が出された。避難所に26世帯68人が避難したほか、知人、親類宅等に避難した。

(2)石倉山地滑り後の対応 7月4日午前0時より亀裂が顕著になり、地滑りが拡大してきた。午前6時に石倉山地区地滑り避難計画による伝達系統図に基づいて福德地区避難勧告、人柱・江迎地区避難準備の緊急通報が行われた。松浦市は午前11時に災害対策本部を設置した。福德地区の住民が避難したままなので、災害対策本部は解除されなかった。7月5日から避難者は昼間、家財道具の持ち出し及び洗濯のために福德地区への立ち入りが許されたが、夜間の滞在はできなくなった。避難所には炊事、風呂の施設がないので、食事は弁当、風呂は別の施設に2日おきに送迎した。避難生活が長引くため、松浦市は、7月9日仮住居の斡旋を行った。災害救助法が適用されなかったため、松浦市が避難に対して一部援助した。

4. 石倉山地区地滑り避難計画 昭和63年8月に発見された亀裂に設置された伸縮計の記録は民家から長崎県県北振興局に連絡され、その結果が松浦市に伝達されるシステムになっている。これらのデータ及び気象警報をもとに松浦市では地滑りの被災が予想される松浦市今福町福德、人柱、江迎地区の住民に対して作成

した「石倉山地区地滑り避難計画」に基づいて松浦市長が避難勧告・指示をしている。

5. 福德地区住民の対応 福德地区は、かつての福德炭鉱のあったところで、現在でも炭住が残っており、以前炭鉱で働いていた住民もいる。この地区の1世帯あたりの家族数は2.2人で高齢化の進んだ過疎地である。著者等は、平成2年12月15、16日の両日福德地区の避難世帯にアンケート調査を実施した。

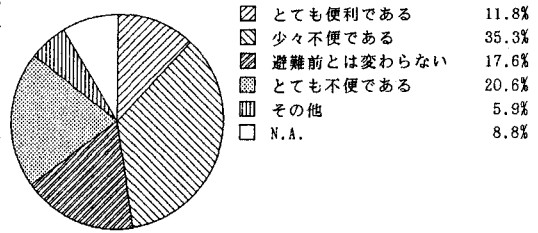


図-1 現在の避難生活はどうか

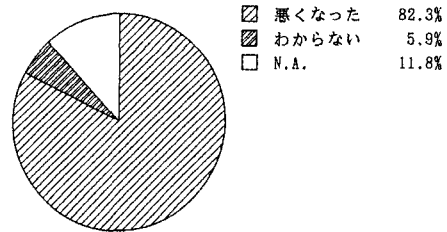


図-2 避難生活によって経済状態はどう変化しましたか

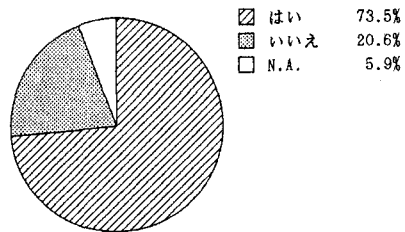


図-3 現在の生活に不安を感じますか

(1) 石倉山地区地滑り避難計画に対する評価 平成2年6月21日に地滑り災害危険区域内説明会が実施されているが、これを「知っていた」は72.8%で、「知っていた」と回答した住民は全員説明会に参加している。この説明会に参加したことが、実際の避難のときに「役立った」と77.9%が評価している。「地滑りが発生したときの避難連絡体制を知っていた」の回答は85.3%で高い数値であるが、「この体制で十分である」とする回答は57.1%と必ずしも高くない。次に、「あなたの地区の避難場所を知っていましたか」の問に対して88.3%の住民が「知っていた」と答えている。避難経路については、44.1%が「問題がある」と答えており、その具体的内容は、「避難路が狭い」、「避難路に危険箇所がある」の施設面の不備他に、「病気や高齢者が多いこと」、「避難誘導を行う若年層が少ないこと」が大きな理由となっている。

(2) 今回の地滑りによる避難 地滑りが進行していると知った住民は、松浦市から避難勧告が出される前に自主的に避難を開始した。「自主避難をしましたか」との問に「はい」と70.6%が答えている。自主避難をした理由は、

「雨の降り方と地滑り情報とのかね合い」、「身のまわりの状況」、「隣近所との相談の結果」などである。避難生活で困ったことを聞いたところ、「風呂」、「洗濯」と大部分が答え、約半数が食事に困ったと答えている。「希望どおりのところに引っ越しできましたか」の問に対して、「できた」は32.4%、「できなかった」は64.7%と「できなかった」とする回答が多い。現在の避難生活の様子(図-1)を聞いたところ、「前と変わらない」は17.6%と少なく、「とても不便である」11.8%、「少々不便である」35.3%と、47.1%が不便さを訴えている。反面、20.6%が「便利になった」と回答している。一方、避難生活によって、経済状態は「悪くなった」が82.3%と回答(図-2)し、73.5%が「現在の生活に不安」を感じている。「あなたの避難生活は長く続くと思いましたか」の問に対して、「はい」44.1%、「いいえ」50.0%と判断がわかれている。「防災工事が終わり、避難勧告が解除されたら、元の家に戻りますか」の問に対して、73.5%が「戻る」と答えている。

6. まとめ 本調査の結果をまとめると、次のようになる。

(1) 松浦市による避難対策は、今回の地滑りによる住民の避難対策に有効であったが、避難路、避難場所には問題があった。地方都市では高齢化、過疎化が進んでいるために、独力による避難が困難になっている。

(2) 住民は、長期にわたる避難生活で、生活の不便さ、不安及び経済的負担増を訴えている。家屋や人的被害がない場合にも、避難者に対する救助の方策も必要である。

謝辞：本研究を行うにあたって、松浦市総務課、松浦地区消防署、長崎県県北振興局林業課及び不自由な避難生活を送られている今福町福德地区の皆様のお世話になったことを付記する。